

長野県埋蔵文化財ニュース

No. 23

1988. 1. 15

(財) 長野県埋蔵文化財センター

〒388 長野市篠ノ井布施高田字佃963-4

TEL 0262-93-5926



↑ (上) 方形周溝墓全景
(下) 周溝内壺棺出土状態

←「木炭棺」近景

『木炭棺』出土の方形周溝墓

かいと
垣外

遺跡

上郷町教育委員会 山下 誠一

垣外遺跡は、下伊那郡上郷町下黒田地籍に所在し、天竜川左岸段丘の低位段丘Ib3上でいわゆる『うわだん』の段丘面に立地している。標高は430m前後で、天竜川との比高差は140mを測る。

調査は上郷町役場が行なう小規模排水対策特別事業に先立ち9月中旬から実施され、遺跡の北西部を対象として約5,000㎡を発掘した。検出遺構は、縄文時代の堅穴住居址13軒、弥生時代後期の堅穴住居址24軒・方形周溝墓11基、奈良時代の堅穴住居址1軒、中世の堅穴住居址3軒、土坑106、溝址13本などである。

特筆すべき遺構として『木炭棺』がある。これが検

出されたのは方形周溝墓で、2.6×2.2mのやや大きな主体部から発見された。木炭棺は約1.1×0.6mで、若干船底状を成す底部にはほぼ全面に一枚の板からなる炭があり、10cmの高さを測る側板の炭も良好に残存していた。小口痕が認められて小口板は普通の板を使用したものと推測される。全体とすれば組み合わせて箱状をなしている。内部からはわずかに骨が検出されたが、副葬品は見られなかった。

そのほかに、壺棺が検出された方形周溝墓周溝もあり、集落と方形周溝墓の関連などを考える上で貴重な資料を提供した。

昭和62年度長野県下主要遺跡発掘調査速報

本年度も県下全域で約180ヶ所の遺跡発掘調査が実施された。まだ整理に入った段階ですが、話題となった中から13遺跡をえらび、ホットな情報を提供してもらい特集としました。

副葬品を多く出土した円墳

げん なみ
源 波 古 墳

箕輪町教育委員会

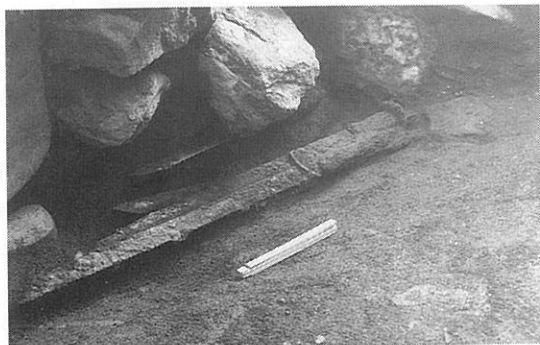
箕輪町東箕輪長岡新田に「箕輪ダム」建設が計画されたが、それに伴う記念公園事業としてグラウンド造成が地元から要請された。本古墳はその計画区域内にあったので、事前に町教委によって昭和62年5～6月にかけて調査することになった。

本古墳は長岡古墳群中の1つで、以前から勾玉・須恵器等の出土が確認されていたが、現状では僅かな石積みが残る程度で、ごく一般的な小円墳とされていた。しかし、調査の結果、予想以上の成果が得られたので以下その概要を記したい。

古墳の規模は、直径約20mの円墳で、幅1～3mの周塹の存在も確認した。内部主体は、羨道の長さ4m、幅0.95m、玄室長さ7.5m、最大幅1.65mを計る横穴式石室である。石室は玄門部が向かって右側が15cmほど広がる片袖式で、玄室中央部右側のみ胴張りを示す。自然石を用いた乱積みで、裏積は認められない。

特記すべきは副葬品であろう。一部盗掘を予想されるが、主要な出土品として、直刀9振り、金環類16ヶのほか轡が4組、鉄地金張留金具、雲珠、辻金具など馬具類も多く、また刀装具類の多くには金張りが認められるなど黄金造り大刀を思わせるほどである。なお人骨の量もおびただしく、数人の被葬者が推定される。

遺物は整理中であるが、本古墳は前方後円墳である松島王墓に続く、6世紀末～7世紀初頭の築造と推測している。半ば破壊されたような円墳の調査の重要さ



源波古墳石室内直刀出土状態

を知ると共に、今後上伊那地方古墳研究の重要な資料を得た点大きな成果といえよう。

中世鳥形木製品や木簡出土

かま ぶち
釜 淵 遺 跡

飯山市教育委員会 望月 静雄

釜淵遺跡は飯山市大字寿字江下に所在し、農村総合モデル事業の一環で行なわれる圃場整備事業に伴い緊急の発掘調査を実施した。遺跡は飯山盆地の西縁、外様平を望む黒岩山(938.6m)の山麓に位置し、中腹より湧出する小河川の侵食斜面の標高340m付近に占地している。

調査は昭和62年5月11日より6月18日にかけて、市教育委員会の組織した遺跡調査団(団長高橋桂氏)によって実施された。調査面積は約1,500㎡である。

調査の結果、中世の掘立柱建物址4棟、小堅穴(仮称)5基および縄文・弥生時代の土壌3基が検出され、遺物では、縄文後期や弥生中期土器片、中世土師器・珠洲系陶器・高麗青磁などが出土した。

特筆すべき遺物には、同一の小堅穴より出土した鳥形木製品・木簡・漆碗が挙げられる。本遺構は信仰に係る施設、あるいは廃棄に伴い祭祀を執行した場所であろう。ただし、プランは明確でなかった。鳥形木製品は挿し込みの翼をもち、体長9.7cm、翼長10.3cmである。木簡は全長14.8cm、幅2.5cmで、厚さは1mmと非常に薄い。文字は赤外線テレビにより、(表)急々如律令、(裏)永仁四年□月□日と判読できた(奈文研綾村宏氏による)。漆碗は内・外面とも黒漆で、文様はないが、遺構外より出土した他の1点は朱塗の文様が描かれている。以上の遺物は県内でも初見あるいは類例が少なく極めて貴重といえよう。

また、中世柱穴群より柱根が約40本出土した。径約15cmで、面取りや下端に切り込みを入れた例がある。

紀年銘木簡の出土により、本遺跡は13世紀代を中心とした集落址と考えられる。中世の外様平については不明な部分が多いが、文治2年(1186)の左馬寮常岩牧の存在は明確で、その支配者とされる常岩氏が建武2年(1135)に市川氏によって滅ぼされていることから、時期的には常岩氏の治世下といえる。なお、遺跡の詳細については、陶磁器・柱根の分析や文献面での検討

によって今後究明していきたいと考えている。

県下3例目の銅印「長良私印」

みまざわかわさかん

三間沢川左岸遺跡

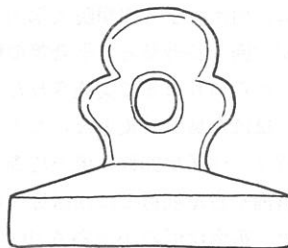
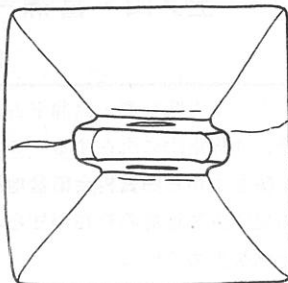
松本市教育委員会 竹原 学

三間沢川左岸遺跡は松本市の西部、和田地区に所在する。調査は昭和62年5～7月に行われ、集落の中心部約7,500㎡を完掘した。遺構は平安時代竪穴住居址130、掘立柱建物址11、溝、土塋等で、概ねⅠ期：9世紀後半～末、Ⅱ期：10世紀前半～中頃に大別される。

住居址は全てカマドがあり、大きく柱穴のあるものとないものに分かれる。前者は大型の住居に多いが数は少ない。その変遷は柱穴をもつ住居はⅠ期が4本柱であるのに対し、Ⅱ期では3間×3間の柱配置が現れ、大型化する。柱穴のない住居は逆に小型化し、構造・規模の差がより顕著になる。

集落は東西に走る3本の溝により4分され、住居址は北側2区画に100軒以上まとまり、逆に建物址は南半に多い。住居址は数軒が重複して1つのまとまりをなすが、溝を挟んで接するように並ぶ個所もある。Ⅰ期の柱穴をもつ住居は散在するが、Ⅱ期のそれは中央部に偏在する。短期間に営まれた集落でもあり、多分に計画性を感じさせる状況を呈している。

遺物は土器類では緑釉陶器の多出が目される。その多くは住居址出土で、碗・皿等が多い。松本平で緑釉陶器の頻出する遺跡は吉田川西・県町等限られており、本遺跡もその1つに数えられよう。その他の遺物として銅製品が目立った。内訳は帯金具5・富寿神宝1・八稜鏡1・銅印1



三間沢川左岸遺跡出土長良私印の印影(上)と実測図(1:1)(下)

で、住居址より1～2点ずつ出土した。帯金具はⅠ期の柱穴をもつ住居に見られ、八稜鏡はⅡ期の住居址より出土した。「長良私印」を出土した22号住は柱穴のない一般的な住居で、Ⅱ期に入る可能性がある。印は方一寸



「長良私印」印面

(縦3.3×横3.2cm)の荅紐印で、保存状況は良い。字はめりほりのある書体で深く刻まれ、朱の付着が見られる。「長良」なる人物は『信濃史料』所載の文書中には見られない。管見では権中納言藤原長良しか知らないが、本印と結びつける根拠はない。官人等よりもたらされた可能性があり、遺跡の性格を暗示していよう。なお、県内出土の銅印は、3例あり、発掘調査例はこれが初めてである。

以上、整理途上での知見を記したが、本遺跡・遺物は平安時代の住居・集落構造を考える上で第一級の資料であると共に、松本平西部開拓史を語る上でも重要な発見であり、今後の整理・分析が期待される。

穂高町古墳群との関連

ふじ つか
藤 塚 遺 跡

穂高町教育委員会

藤塚遺跡は南安曇郡穂高町等々力・白金地籍に所在し、鳥川扇状地の扇端に立地する。今回の調査は、大型店進出に伴う約3,500㎡が対象となり、昭和62年7月3日から9月2日にかけて実施した。

本発掘に先だち6月に500mに及ぶ8本のトレンチをいれ、試掘調査を行い遺構の埋没状況を把握したところ、発掘区西側は地表面より30cm、東は70cmで遺構面が確認された。昭和59年～61年に発掘調査した矢原遺跡群(本遺跡より1km南)では、地下平均1.2mで平安期、また、約2mで古墳全期の遺構が確認されたことを考えると、本遺跡付近が微高地であったことが推察できる。また、矢原遺跡群は古墳時代前半から中世にわたるのに対し、本遺跡は古墳時代後期に限られていることが判明した。

発見された遺構は、古墳時代後期7世紀前半の住居址30軒、掘立柱建物址5棟、溝址などである。住居址は東カマドが最も多く23、その他、北が3、南と西がそれぞれ2であった。規模は5m前後が多く、9m前



藤塚遺跡出土土器群

後の大型住居も3軒あった。掘立柱建物址の中には、1間×5間、2間×5間のかなり横長の建物址が見られ注目される。

遺物は、土師器、須恵器、石製品、鉄製品、銅製品などがある。土器では量的に須恵器にくらべ土師器が圧倒的に多いが、須恵器高坏片が多いことと赤焼け、歪みのある製品がかなりあることが目についた。また、26住よりは埴瓶が出土した。石製品では紡錘車、砥石、鉄製品では鎌、刀子など、銅製品では耳環がある。

最後に、穂高西山山麓にある古墳群との関係であるが、本遺跡より西5kmの牧地籍にあるE古墳、狐塚1号墳出土の高坏と形態的に近似するものがあり、今後、比較検討が必要となってこよう。

弥生・古墳時代の集落址

びわづか 琵琶塚遺跡

琵琶塚遺跡発掘調査団 塩入 秀敏

上田市小泉の琵琶塚遺跡の発掘調査が、圃場整備事業の施行に先立ち約6,000㎡を対象に昭和62年7月上旬から11月上旬までの4ヶ月間にわたり実施された。

調査の結果、C・D・E・Fの4調査区から弥生時代後期から平安時代中頃にわたる住居址約80と土壇・溝址・ピットなどが多数検出され、それに伴う膨大な遺物が出土した。問題の多い遺構と遺物についてののみ概述したい。

弥生時代：後期後半の箱清水式期に属する住居址が数軒検出されたが、特に深さが約70cmもある5m×4.3mの隅丸長方形プランの62号住居址が白眉である。覆土中から夥しい量の土器とその他の遺物が出土したが、土器は典型的な箱清水式で、退嬰化段階を含まない点などから、その古い段階に位置づけられよう。図上復元可能を含め個体数は100をゆうに超えそうである。その他、石包丁・磨製石鏃・鉄斧・銅剣・鉄石英

製細形管玉・ガラス小玉がある。夥しい土器の量、変わった遺物組成は少量検出された骨粉と併せ考えると、住居址廃絶後、墓墳としての再利用を考慮したい。

また、F区で1辺2.5～3m程の箱清水式期の小住居址が3軒近接して検出された。F区全体の住居址配置状態からみると、この小住居址群は縁辺部にかたまって存在する。この手の小住居址の性格については従来云々されているが、弥生時代の階級分化の現象が集落内に具現されたものとも考えられる。

2間×2間の掘立柱建物址は箱清水式期の総柱構造の建物址で、西側柱列のさらに外側に柱穴より小規模のピット1をもつ。このことから階段をもつ高床式の倉庫址と見ることができ、この見方が正しいとすると県内でも類例の少ない遺構となろう。

古墳時代：後期に中心があるものの初頭期・前期にも見るべきものは多い。特に初頭期の40号住居址からは他地域の影響を受けた土器を多く出土しており、在地の土器を凌駕する勢いである。また、27号住居址は、後期の7世紀前半に属するが、良好なセットを出土しており、上小地方の該期の編年を組む上で不可欠の資料を提供することになった。

現場調査は終了したが、遺物の整理・報告書の作成は63年度事業であり、これから整理に入る。大方のご指導ご教示が得られれば幸いである。

県下最大規模の窯址群

うえのやま しょうぶだいら

上ノ山・菖蒲平 古窯址群

豊科町教育委員会

上ノ山古窯址群・菖蒲平古窯址群は、豊科町田沢地籍、通称東山に所在する。この東山に連なる松本市芥子望主山から四賀村会田盆地周辺にかけては、多くの須恵器古窯址群の存在が知られており、本遺跡はその一画を占めている。

発掘調査はゴルフ場造成に伴い、田辺昭三氏を団長に、明治大学・國學院大学・立正大学・奈良大学・平安学園・長野県考古学会等の協力を得て、昭和62年4月から11月末まで実施された。

ほぼ全域が対象となった上ノ山古窯址群では、窯窯17基・住居址25軒・焼土坑等が、一部が対象となった菖蒲平古窯址群では住居址1軒と焼土坑等が調査された。窯窯は沢の小支谷を中心に分布し、規模は全長4～8m・最大幅約1.2mを測る。住居址は窯に近接した緩斜面と平坦地で検出されており、灰釉陶器・鉄器等が出土する例もある。焼土坑は、床及び壁が焼け、



上ノ山古窯址群遠景

覆土に焼土・炭をもつもので、多数検出されており、形態・規模等も多様で中に遺物を伴う例もあって、今後性格づけが課題となろう。

遺物はコンテナ700以上にのぼる。須恵器の多さは当然として、土師器・黒色土器も多いのが特徴的である。また、特殊な遺物には陶硯・瓦等がある。

以上、本遺跡は平安時代の須恵器窯を中心に、居住域等も含めた生産遺跡であることが判明した。現在、膨大な資料の整理作業を始めており、その過程で、本遺跡の性格がより明らかになるであろう。また、消費地である集落遺跡出土遺物との対比等、今後の研究により、さらに具体的な成果が得られよう。

なお、調査地は既に造成が進められているが、工事に係らない部分は保存を図り、菖蒲平古窯址群の20基以上の窯も現状保存の施策がとられている。

縄文中～後期大集落址

いん だて
戊 立 遺 跡

東部町教育委員会 小林 真寿

戊立遺跡は、昭和8年に国指定史跡となり全国的に見ても非常に早い時期に復元家屋が作られた遺跡である。昭和58・59年にかけて実施された範囲確認調査において、その遺跡範囲は東部町分だけでも約63,000㎡（小諸市分も含めると80,000㎡以上）の広がりをもつ大遺跡であり、また、時期も縄文時代中期～後期（勝坂期～加曾利BⅡ期）である事が明らかとなった。従来の調査で5軒の住居と数多くの土壇・ピットが検出されているが、そのなかには2軒の敷石住居が含まれている。2軒とも全プランは確認されていないが、1軒の住居は全面敷石ではなく、壁との間に60cmほどの空白帯があり、他の住居では深鉢の底部を埋設した炉が確認され、ほぼ完形の注口・ミニチュア両土器が出土している。ともに堀之内Ⅱ式期の所産であろう。

今年度にはいり、遺跡西側を南西から北東に走る道路の拡張工事が実施される事となり、11月7日より調査を開始して12月9日現在継続中である。調査範囲が巾最大4m、最小50cmに限定されるため遺構の全プランを明確にできないものの、20軒をこえる住居と60基をこえる土壇が確認されている。これらは1軒の敷石住居を除いて、全てが縄文時代中期であり、出土土器の大半もこの時期である。一部には、時期は不明だが、50cm大の倒れた立石や、接合して判明したが、縁石に先行した住居の炉石を使用した例もある。

今回の調査範囲が、戊立遺跡における縄文時代中期の遺跡縁辺部に相当し、後期戊立遺跡とは異なる占地と展開を想定できる。その点から今回の敷石住居などは集落における性格を考えるうえで大変興味深い。

縄文後・晩期の墓址と鹿角製鋸頭出土

みや ざき
宮 崎 遺 跡

長野市埋蔵文化財センター

- 〔所在地〕 長野市若穂保科上和田
〔調査原因〕 団体営土地改良総合事業（畑灌漑用パイプ埋設）に伴う緊急発掘調査
〔調査期間〕 昭和62年10月26日～12月14日
〔調査面積〕 巾約1m、総延長約700mのトレンチ
〔調査者〕 長野市教育委員会（市埋蔵文化財センター）

〔立地〕 遺跡は保科扇状地の扇端近くにあり、そして堀切山・奇妙山に源を発した赤野田川が、遺跡南側に突出した低い丘陵状の東山に阻まれ、流路を北に変え、小規模な河岸段丘を形成する部分で、標高は370mを測る。

〔過去の調査〕 昭和23年、興津正朔氏により発掘調査が行なわれ、敷石遺構が確認された。昭和60年、本調査の原因でもある幹線パイプ埋設に際し、発掘調査を実施したところ、敷石住居址・敷石遺構及び縄文時代晩期の径5mの堅穴住居址を検出している。

〔今回の調査〕 遺跡推定範囲のほぼ全域を対象としたが、北側の一部は包含層が深く、工事による破壊の恐れがないので調査を見送った。調査はⅤ層上面まで及んだが、このうちⅢ層・Ⅳ層上面が縄文晩期の氷式、Ⅳ層下部が同期佐野式にあたることを確認できたことを第1の成果とする。第2は、縄文後・晩期と推定される墓址の検出であり、それも地域を異にしている点である。後期と推定される墓址は、赤野田川近くの河岸段丘から石棺墓8基、土壇墓(?)1基を確認した。



宮崎遺跡の抱石ある3号土壌墓

石棺墓は大石を立てた状態で壁を作り、底面が石敷になるものが多いが、側壁を小口積みにしたり(1基)、底面に石敷がなかったり(2基)、また、重葬例(1基)や、耳栓を付したもの(1基)など、その内容は様でない。

晩期はこれより約200m北側の扇状地内にある。やはり集中して検出されており、全て土壌墓と推定する。確認人骨数は伸展葬のみ10体に及ぶ。写真は抱石のある3号とその他に3体埋納されている。この他該期の墓施設として埋甕が2個発見された。

第3は、多量の獣骨片とともに鹿角製銚頭2点(1点は昭和60年度)・骨針等の骨角製品の出土にあり、そして耳栓等の装飾品、石棒・土偶・土面(?)等の呪術品の発見も上げ得よう。

張出部に石積み構造をもつ柄鏡形敷石住居址

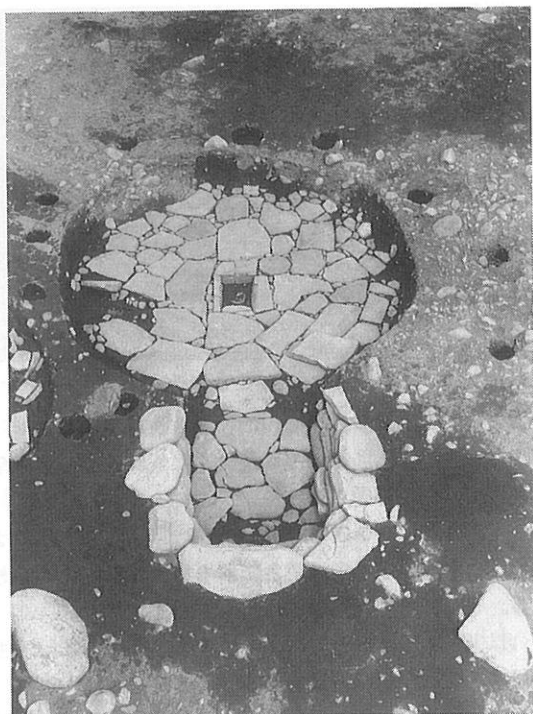
ひら いし
平 石 遺 跡

望月町教育委員会 福島 邦男

平石遺跡は、望月町大字協和字平石に位置しており、蓼科山を源流とする八丁地川左岸の河岸段丘上に営まれていた。発掘調査は、望月町農村基盤総合整備事業に先立って、昭和62年5月から9月にかけて町直営で約1万㎡を実施した。

調査の結果、樋沢式及び同併行期の土器が多量に出土したこと、中期末と後期前半期の柄鏡形敷石住居址を6軒検出したことが大きな成果であった。

検出した6軒の敷石住居址のうち、中期が4、後期が2で、このうち後期の第16号住居址は、張出部が石積み構造になっていることから、今までに類例がなく我国では最初の発見となった。本址は主軸がN6°Sを示し、主体部は平面が正円形で、東西が320cm、南



平石遺跡の張出部に石積み構造をもつ敷石住居址

北305cm、深さ35~40cmである。炉址は床面の中央に位置し、55×40cmを測り、南側の炉石は河原石、他の三面は鉄平石(安山岩)が使用されており、内部には堀之内Ⅱ式の小形深鉢形土器が埋設されていた。敷石は、炉址を中心に鉄平石が密に敷かれていたが、炉址南側の敷石2枚だけが巨大な河原石を置いていた。

張出部の平面形態はほぼ長方形を成し、主軸に沿って南北195cm、東西100cm、深さ45~55cmを測る。張出部の三方は5から6段に石積みが成されており、横積みで河原石が圧倒的に多いが、部分的に鉄平石も利用されていた。床面は大形の偏平な河原石が敷かれ、主体部と張出部の接点には、床面レベルより一段下げて鉄平石の框石が置かれていた。

本址の西側に隣接して検出された堀之内Ⅰ式期の第15号住居址も、張出部が2段の構造になっており、この2軒の住居址を標識に、「平石型柄鏡形敷石住居址」としてタイプ設定が可能かと思われる。

敷石住居址は、石が敷かれている構造から、特殊な遺構か一般の住居址かの論議が、今日まで継続的に行なわれているところであるが、これまでの資料の集積や平石タイプのような新たな構造をもつ遺構の発見により、柄鏡形敷石住居址の意味についてその核心にせまることも間近であるように思われる。なお、縄文早期押型文土器等については後日にゆずりたい。

弧状列石址と敷石住居址群

はばた えんこうぼう
幅田遺跡群円光房遺跡

戸倉町教育委員会

埴科郡戸倉町更級地区の円光房遺跡は、幅田遺跡群の南東に位置し、およそ2haの水田と果樹園地帯を呼んでいる。千曲川左岸の湯沢川扇状地が、千曲川沖積地と接するところに、いわば扇状地端崖を形成しているが、そのハバ上の約12haが幅田遺跡群である。湯沢川や雄沢川は、善光寺平南部の名峯冠着山（姨捨山）に端を発し、開析と堆積を続けて主な地形を形成しているのである。古くは更級の里と言われ、平安初期から姨捨山の月の名所として歌枕となって多くの和歌を生んで来た土地柄である。

農業基盤整備事業による緊急調査として昭和62年7月末より11月初旬まで、およそ3,500㎡を調査した。その結果、縄文前期初頭の中道式期の住居址1、諸磯B式期の住居址1、縄文中期末葉の住居址24、内敷石住居址9、石棒等立石を伴う弧状列石址や、線状列石址が検出され、続いて縄文後期初頭の堀之内I式期の住居址5、内敷石住居址4、集石遺構2、縄文晩期住居址1、土器だまり1、配石墓1が検出された。

縄文中期末より晩期前半に至る集中した遺構群と遺物群が検出され注目される。晩期土器だまりは、小形壺、浅鉢、坏形土器等が集積し、大形の中空土偶頭部片も注目される。

また古代の掘立柱建物址も8棟ほど確認され、2間×3間、5間×7間の大形建物柱列址も注意されるところである。柱根の残るものもあり、歌枕の更級の里とも関連し多くの課題が山積みしている。

千曲川中流域の貴重な遺跡として保存活用を検討中である。



円光房遺跡敷石住居址の炉址（中央下隅に石棒）

瓦塔・罎口を出土した

しょう ぶ ざわ
菖蒲沢窯址

塩尻市教育委員会 小林 康男

菖蒲沢窯址は、塩尻市大字片丘北熊井に所在する。筑摩山地西麓の大沢川、牛亮沢川によって南・北側を開析された台地の南斜面に立地している。南斜面の下方は菖蒲沢と呼称される湧水に臨み、縄文中期・平安時代の大集落址、祖原遺跡は北に隣接している。

本窯址は、塩尻インター林間工業団地造成事業に伴う工事中に発見され、昭和62年5月9日から同20日まで緊急発掘調査が実施された。その結果、窯址1、住居址1、墓域1の遺構と須恵器、瓦塔、罎口など多くの遺物が出土した。

窯址は、全長6.4m、焼成部幅1.2～1.4m、燃焼部幅1.2m、残存壁高20～55cmの半地下式無段登窯である。壁面には、扁平で大きな礫をあたかも古墳の側壁のように埋置している。焼成部はおよそ23度の傾斜を示し、燃焼部は平坦となっている。燃焼部下には、2×1.2m、深さ1.2mのすり鉢状のピットが穿れている。このピットの下から、8.5×9.0mの扇状に灰原が拡がり、窯内および灰原から須恵器杯・蓋を主体に、少量の須恵器壺・瓦塔が出土した。

この窯址から5mほど下方に1辺5.5mを測る竪穴住居址が検出された。床面全面に焼土と粘土が散布し、床面上からは窯址と類似した須恵器の出土が多い。おそらく窯址と関係をもった住居であろう。この住居で特に注目されたのは、住居西半の床面上に折り重なるようにして発見された瓦塔の存在である。基壇、各層の屋根・宝珠・水煙まで比較的残りが良く、復元作業が進めばほぼ全形をうかがうことが可能と思われる。ちなみに今までに復元された基壇部分のみをみると、一辺47cm、高さ13cmの大きさとなっている。

窯址・住居址出土の須恵器は8世紀後半に比定できることから、この瓦塔も同時代と考えてよいであろう。



菖蒲沢窯址の瓦塔出土状態

これらの遺構・遺物のほかに、住居址床面に穿れていた、平安時代の墓墳がある。2.05×0.86m、深さ30cmのこの墓墳内からは、その中央に鰐口(径7.3cm)が、そして東壁下に灰陶陶器皿、土師器小形甕が一かたまりに副葬されており、注目された。

このように、今回の菖蒲沢窯址の調査は、松本平南半としては初の窯址発見、窯址と住居址がセットで把握されたこと、県内初の略完形瓦塔の出土、全国的にも珍しい平安時代墓墳への鰐口の副葬など幾つかの注目すべき成果を納めることができる。

埋葬馬を伴う古牧関係集落址

いもじや 鋳師屋遺跡群

御代田町教育委員会 堤 隆

浅間山の南麓、北佐久郡御代田・佐久市小田井・小諸市御影にまたがる鋳師屋遺跡群の発掘調査が、本年度10月をもって終了した。本調査は、県営圃場整備事業に伴う緊急発掘調査で、御代田町・佐久市・小諸市各教育委員会のそれぞれが主体となって、遺跡群の5遺跡において足掛け4年におよび計10ヘクタールにもわたる大規模な発掘調査がなされた。

鋳師屋遺跡群を構成するのは、野火付・鋳師屋・前田・十二・根岸の5遺跡で、これらはいずれも低地に

画された帯状微高地上に残された集落址である。時代的には、古墳時代中期より鎌倉時代におよぶが、わけでも奈良・平安時代の集落が注目を集めている。

鋳師屋遺跡群の奈良・平安時代の集落を構成する主な遺構として、堅穴住居址440軒と掘立柱建物址430棟が検出されている。また、このほか特筆すべき発見が野火付遺跡においてなされた。平安時代初頭の埋葬馬5頭が発見されたのである。

この集落は、埋葬馬の検出とも相まって、次に述べるこの地域の歴史的環境とも深く結び付いて形成されたものと推察されるのである。

それでは、翻って鋳師屋遺跡群をとりまく歴史的環境についてみてみよう。奈良・平安時代、この遺跡群に隣接する御代田町塩野地籍には延喜式にみえる御牧塩野牧が設置されていたことが予想される。一方、律令制に伴って整備された東山道がこの付近を通過したものとされている。

鋳師屋遺跡群の奈良・平安時代の集落は、まさにその塩野牧経営にあたって設置された集落ではなかったか。そしてその埋葬馬は塩野牧馬ではなかったかとも考えられるのである。

このような鋳師屋遺跡群の性格については、来年度に刊行される最終報告書のなかでさらに詳しく取り上げてゆくことになろう。

埋文センター日記抄(昭和62年10月～12月)

〈(長)は長野、(佐)は佐久、(松)は松塩筑調査事務所〉

10月5日 城ノロ・東ねぶた調査終了、琵琶坂調査開始(佐)

" 8日 干草場調査終了(佐)

県内埋文担当者会議(於長野市) 佐原眞氏講演

" 12日 関越自動車道上越線起工式(岩村田)(佐)

" 13日 西ねぶた調査終了(佐) 野口調査終了(長)

日大鈴木保彦助教授北村遺跡視察指導(松)

" 14日 信州大学西沢寿晃氏 " " (")

" 16日 文化庁岡村道雄技官 " " (")

北村遺跡調査についての調整会議(松)

" 21日 信州大学小林詢先生松本平の地形調査指導(松)

茨城県教育財団岩上・津上氏視察(松)

" 23日 全埋文協関中ブロック連絡協議会(於戸倉町)

" 26日 埼玉埋文事業団早川智明専務理事・坂野和信主査

28日まで3事務所・現場視察

" 29日 信州大学西沢寿晃氏再び北村遺跡へ(松)

" 30日 大参義一教授他信大教官約30名視察(松)

丸山古墳群につき文化課などと協議(佐)

11月3日 麻績村文化祭にて野口遺跡を中心に展示会(長)

北村遺跡E地区現地説明会(松)

" 5日 明大戸沢充則教授北村遺跡視察指導(松)

古代吉備文化財センター内藤氏他2名来所(松)

" 7日 東大赤沢威・独協大馬場悠男氏北村遺跡視察(松)

" 8日 長門町鷹山遺跡調査団10名来所(松)

" 10日 栗毛坂遺跡B-b地区調査開始(佐)

佐藤日本民俗資料館長ら63年夏展示会打合(松)

" 12日 関東甲信越静埋文行政担当者会議(於勝田市)

名古屋大学斉藤孝正氏を囲む研修会(松)

" 13日 国土地理院安間氏他2名、地形関係で来所(松)

" 16日 佐久調査事務所増築竣工祝賀会(佐)

" 19日 榎原考古学研究所石野博信副所長北村視察(松)

" 25日 関東甲信静埋文担当者研修協議会(於栃木県)

" 28日 北村の件で戸沢充則氏と協議(於東京)(松)

" 30日 丸山古墳群調査終了(佐)

〔編集後記：年末の忙しいなか、県下各地から最新情報をお寄せいただきました。編集の関係上写真・挿図を掲載できなかった遺跡がありますが、悪しからず御了承下さい。〕